

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況 (2023 年)

徳島県立保健製薬環境センター

新田 真友・石田 弘子・高木 夕嘉・後藤 賢且

Infectious Diseases Surveillance Reports in Tokushima Prefecture in 2023

Mayu NITTA, Hiroko ISHIDA, Yuka TAKAGI and Yoshikatsu GOTO

Tokushima Prefectural Public Health, Pharmaceutical and Environmental Sciences Center

Key words : 感染症発生動向調査 Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases

I はじめに

当センターでは、「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして、徳島県における感染症の発生情報の収集、解析を行っている。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

今回、2023年1月から12月までの患者発生状況についてまとめたので報告する。

II 方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により指定されている一類から五類感染症、新型インフルエンザ等感染症の91疾患（全数把握対象疾患）、指定届出機関から届出を受ける26疾患（定点把握対象疾患）とした。

感染症の発生情報は、定点把握対象疾患のうち、内科、小児科、眼科及び基幹定点週報分は、月曜日から日曜日までの週単位で、性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った。

III 結果及び考察

1 全数把握対象疾患の届出状況 (表1)

(1) 一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

(2) 二類感染症

① 結核

年間届出数は80件で、前年(95件)より減少した。診断の類型では、「患者」が54件、「無症状病原体保有者」が25件、「疑似症患者」は1件であった。届出者を年齢別にみると、70歳以上の届出が合計60件と全体の75%を占めた。性別では、男性35件、女性45件と女性が多かった。

年齢別に類型を比較すると、70歳以上では「患者」が75%と大部分を占めたのに対し、70歳未満では「無症状病原体保有者」が55%であった。

職業別では、医療・介護などの施設関係者や厨房職員等、集団感染に繋がる環境で従事する者も見られたことより、感染拡大防止のため施設関係者等に対し、感染予防啓発や施設内感染対策の徹底が不可欠と考えられた。

(3) 三類感染症

① 腸管出血性大腸菌感染症

年間届出数は11件で、前年(19件)より減少した。一般に本疾患は夏から秋に多いとされ、月別の届出数推移では、7~8月に5件と約45%を占めた。年齢別では、10歳未満~70歳代まで幅広い年齢層で届出があり、性別では、男性4件、女性7件であった。診断の類型では、「患者」が10件、「無症状病原体保有者」が1件と、「患者」が多く報告され、血清型別では、本疾患の多くを占めるO157が8件、O26が2件、O103及びO157を共に検出した届出が1件であった。

「患者」報告例の感染経路や感染源は、肉の喫食等の経口感染が5件、不明5件で、感染地域は国内8件、不明2件であった。また、「無症状病原体保有者」1件は、ステーキを喫食した「患者」との接触者健診により報告され、同じくス

テーキを喫食したことによる経口感染と推定された。

(4) 四類感染症

① 重症熱性血小板減少症候群

年間届出数は4件で、前年(1件)より増加した。届出月は6月と10月で、マダニの活動時期にあたる春から秋であった。年齢及び性別は70歳代女性が2件、70歳代男性と60歳代女性が1件ずつであった。感染経路は、草抜き、農作業等の野外活動時にマダニ等に刺咬され感染したと推定された。

徳島県では本疾患をはじめ、つつが虫病、日本紅斑熱など、病原体を保有するマダニ等の刺咬による感染症が毎年発生しており、重症化例も見られる。近年のキャンプブームや登山などの人気の高まりを受け、草むらや山林などマダニの生息地に人が近づく機会が増えており、野外活動時のダニ・昆虫媒介性疾患に対する予防対策の啓発が重要と考えられた。

② つつが虫病

年間届出数は2件であった。届出月は6月と12月で、年齢及び性別は50歳代と60歳代の女性が1件ずつであった。1件はマダニに刺咬されて感染したと推定され、1件は不明であった。

重症熱性血小板減少症候群と同様、ダニ・昆虫媒介性疾患に対する予防対策の啓発が重要と考えられた。

③ 日本紅斑熱

年間届出数は7件で、前年(13件)より減少した。届出月は5~10月と、重症熱性血小板減少症候群と同様にマダニの活動時期と一致していた。年齢別では40~80歳代まで幅広い年齢層から報告され、性別は男性6件、女性1件であった。感染経路は6件が農作業等の野外活動時にマダニ等に刺咬されたと推定され、1件は不明であった。

④ ライム病

年間届出数は1件であった。2016年以降7年ぶりの発生となった。届出月は10月で、年齢及び性別は60歳代の女性であった。種類は不明だが、マダニ等に刺咬され感染したと推定され、感染地域は国内であった。

⑤ レジオネラ症

年間届出数は14件であった。2015年以前は年間1~5件で推移していたが、2016年以降は毎年10件を超えており、過去5年間で最も多かった2021年より減少したものの、漸増傾向にある。届出月は、6~8月、10~12月で、年齢は40~90歳代と幅広く、性別は男性10件、女性4件であった。病型は全て「肺炎型」であった。感染経路は水系感染が3件、土壌感染が1件、不明が10件、感染地域は国内13件、不明1件であった。

(5) 五類感染症

① アメーバ赤痢

年間届出数は1件であった。2019年は7件あったが、2020年以降は毎年1~2件で推移している。年齢及び性別は60歳代の男性であった。病型は「腸管アメーバ症」で、感染経路・地域は不明であった。

② ウイルス性肝炎

年間届出数は2件で、過去10年間の届出数は0~2件で推移している。年齢及び性別は、どちらも10歳未満で、男性1件、女性1件であった。「コクサッキーウイルスA群2型」、「アデノウイルス」が検出されており、どちらも感染経路は接触感染で、感染地域は国内と推定された。

③ カルボペネム耐性腸内細菌目細菌感染症

年間届出数は1件で、過去5年間で最も少なかった。年齢及び性別は、80歳代の男性であった。感染経路は医療器具を介しての感染で、感染地域は国内であった。

④ クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)

年間届出数は2件で、過去10年間の届出数は0~3件で推移している。年齢及び性別は、どちらも80歳代で、男性1件、女性1件であった。病型は「古典型CJD」と「家族性CJD」で、どちらも感染経路・地域は不明であった。

⑤ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

年間届出数は5件で、過去10年間で最も多かった。年齢は80歳代2件、50歳代、60歳代、70歳代が1件ずつで、性別は男性4件、女性1件であった。感染経路は、飛沫・飛沫核感染1件、創傷感染1件、不明3件、感染地域はいずれも国内と推定された。

病原体は、A群が4件、G群が1件であり、2010年代に英国で流行した病原性及び伝播性が高いとされる*S.pyogenes* MIUK lineage (UK系統株)が、2023年夏以降に日本国内でも確認されており、県内でも1件確認された。

⑥ 後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)

年間届出数は2件であり、過去10年間で最も少なかった。年齢は20歳代と50歳代で、性別はどちらも男性であった。病型は「AIDS」と「無症候性キャリア」で、感染経路は性的接触、感染地域は国内と推定された。

現在、保健所等を中心に利用者の利便性に配慮した無料検査・相談が実施されており、地域連携医療機関での診断や報告につながっている。今後も、積極的な普及啓発を推進し、HIV感染の早期発見による早期治療と感染拡大の抑制に努めることが重要と考えられた。

⑦ 侵襲性インフルエンザ菌感染症

年間届出数は1件であり、過去5年間で最も少なかった。年齢及び性別は、70歳代の女性であった。感染経路は飛沫・飛沫核の経気道感染が考えられた。感染地域は国内と推定された。

⑧ 侵襲性肺炎球菌感染症

年間届出数は2件であり、過去10年間で最も少なかった。年齢はどちらも10歳未満で、性別は男性1件、女性1件であった。感染経路は飛沫・飛沫核感染1件、不明1件で、どちらも感染地域は国内と推定された。

⑨ 梅毒

年間届出数は78件で、大きく増加した前年(67件)よりもさらに増加した。年齢別では20～40歳代が59件と多く、全体の約76%を占めた。性別は男性60件、女性18件で、女性の約33%は「無症状病原体保有者」であった。感染地域は国内が70件と推定され、不明8件であった。

現在、我が国では若年層を中心に梅毒患者の増加が大きな問題となっており、積極的な感染予防啓発が重要と考えられた。

⑩ 破傷風

年間届出数は2件であった。過去10年間の届出数は0～4件で推移している。年齢は30歳代と60歳代で、性別はどちらも男性であった。感染経路はさびた釘の刺入による感染とサバイバル訓練での傷等からの感染で、感染地域はどちらも国内と推定された。

⑪ 百日咳

年間届出数は78件と、前年(67件)より増加した。年齢別は0歳～10歳代が68件と多く、全体の約87%を占めた。性別は男性44件、女性34件であった。推定感染経路は家族内感染が65件、学校関連の感染が3件、不明が10件であった。感染地域は国内と推定されるものが77件、不明が1件であった。

(6) 新型インフルエンザ等感染症

① 新型コロナウイルス感染症(2023年1月1日～5月7日)

2020年2月1日より指定感染症に、2021年2月13日より、新型インフルエンザ等感染症の中に新型コロナウイルス感染症、再興型新型コロナウイルス感染症を追加することと改正された。

2022年9月26日より全数届出の見直しの運用が開始され、2023年5月8日より定点把握対象疾患感染症(五類感染症)へ指定された。

届出数は34,779件であり、この期間中の月別届出数は1月の25,022件が最も多く、次いで2月の6,247件、3月の2,149件の順で、感染者数は減少していった。長期休暇等で人々が移動する機会が多い時期に感染者が増加する傾向が認められた。年齢別では、40歳代が5,305件と全体の約15%を占めた。続いて30歳代4,730件、10歳代4,441件、10歳未満4,363件の順に多かった。

表1 全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	2023年	前年
二類	結核	80	95
三類	腸管出血性大腸菌感染症	11	19
四類	重症熱性血小板減少症候群	4	1
	つつが虫病	2	2
	日本紅斑熱	7	13
	ライム病	1	0
	レジオネラ症	14	17
五類	アメーバ赤痢	1	2
	ウイルス性肝炎(E型, A型を除く)	2	1
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	1	11
	クロイツフェルト・ヤコブ病	2	0
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	5	2
	後天性免疫不全症候群	2	4
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1	2
	侵襲性肺炎球菌感染症	2	5
	梅毒	78	67
	破傷風	2	1
百日咳	78	67	
(※)	新型コロナウイルス感染症	34,779	130,116

(※): 新型インフルエンザ等感染症(2023年1月1日～5月7日の届出数)

2 定点把握対象疾患(週報)の動向(表2)

(1) インフルエンザ/新型コロナウイルス感染症定点

① インフルエンザ(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)

年間報告数は13,896件であり、2020年は3,095件、2021年は4件、2022年は42件と、新型コロナウイルス感染症の発生以降、インフルエンザの患者数は大きく減少していたが、新型コロナウイルス感染症対策の緩和に伴い、感染者数が増加した。

本年の流行は、全国的に例年より10週以上早まり、8月下旬(第35週)に流行期入りした後、12月上旬(第49週)にピーク(33.08件/定点)を迎えた。ピークの高さは新型コロナウイルス感染症発生前の2019年(42.57件/定点)と比較して低かったものの、流行期が長期化したこともあり、2019年より報告数が増加している。

年齢層別報告数では、4歳以下16.1%、5～9歳30.7%、10～14歳20.9%、15～19歳7.8%、20歳以上24.6%であり、5～14歳の割合が高かった。

② 新型コロナウイルス感染症

2023年5月8日からの報告数は10,061件であり、6月下旬

(第25週)から増加し、8月下旬(第34週)でピーク(2235件/定点)を迎えた。

年齢層別報告数は、4歳以下82%、5~9歳89%、10~14歳99%、15~19歳70%、20歳代8.0%、30歳代10.2%、40歳代12.1%、50歳代10.2%、60歳代8.5%、70歳代9.2%、80歳以上7.9%と、年齢別での大きな差はなかった。

(2) 小児科定点

① RSウイルス感染症

年間報告数は1,591件と、前年(1,214件)より増加した。

2017年以降、夏から秋にかけて流行していたが、本年は5月中旬(第20週)から増加し、7月中旬(第29週)にピーク(726件/定点)を迎えた。第23~36週で全国平均を上回り、この間の報告数は年間の約83%を占めた。

本疾患は、2歳までの乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数は、0歳27.6%、1歳36.0%、2歳17.8%、3歳99%、4歳以上8.7%であった。

② 咽頭結膜熱

年間報告数は1,117件と、過去10年間で最も多かった。

本疾患の流行パターンは、6月頃から増加し始め、7~8月にピークを示した後、冬季にもピークが見られる。

本年は9~12月に増加傾向が見られ、11月中旬(第46週)にピーク(378件/定点)を示した。

年齢層別報告数は、0~1歳23.3%、2~3歳40.0%、4~5歳23.0%、6~7歳8.5%、8歳以上5.2%であり、5歳以下が約86%を占めた。

③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は544件と、前年(109件)より大きく増加した。

本疾患は、冬季及び春から初夏にかけて増加するとされる。本年は10~12月に増加傾向が見られ、12月下旬(第51週)にピーク(187件/定点)を示した。

年齢層別報告数は、0~1歳5.3%、2~3歳20.4%、4~5歳31.4%、6~7歳21.7%、8~9歳11.4%、10~14歳7.7%、15歳以上2.0%と、2~7歳が全体の約74%を占めた。

④ 感染性胃腸炎

年間報告数は5,193件と、前年(4,006件)より増加した。

本疾患の流行パターンは、初冬から増加し12~1月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一度なだらかなピークがで、その後初夏まで続くことが多い。本年の前期流行は、前年から引き続いて年初(第1週)から増加傾向を示し、2月上旬(第6週)でピーク(796件/定点)が見られ、12月から再び増加傾向を示し、12月中旬(第50週)でピーク(809件/定点)が見られた。

年齢層別報告数は、0~1歳27.6%、2~3歳26.6%、4~5歳

15.4%、6~7歳8.2%、8~9歳4.8%、10~14歳7.9%、15歳以上9.5%と5歳以下の乳幼児が全体の約70%を占めた。

⑤ 水痘

年間報告数は68件と、2017年(352件)以降、減少傾向が続いており、過去10年間で最も少ない報告数であった。

本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行するとされる。本年は大きなピークは見られず、年間を通じて低水準(0.26件/定点以下)のまま推移した。

年齢層別報告数は、0~1歳19.1%、2~3歳20.6%、4~5歳26.5%、6~7歳7.4%、8~9歳10.3%、10歳以上16.2%と10歳未満が全体の約84%を占めた。

⑥ 手足口病

年間報告数は530件と、前年(410件)より増加した。

本疾患は夏期に流行する代表的な感染症である。本年は、9月上旬(第36週)の報告数(139件/定点)が最も多く、年間を通じて低水準のまま推移し、大きなピークはなかった。

年齢層別報告数は、0~1歳42.6%、2~3歳42.8%、4~5歳10.4%、6~7歳2.5%、8歳以上1.7%であり、5歳以下が全体の約96%を占めた。

⑦ 伝染性紅斑

年間報告数は7件と、調査開始以降、最も少なかった前年(4件)と同程度であり、年間を通じて低値(0.04件/定点以下)で推移した。

年齢層別報告数は、0~1歳28.6%、2~3歳14.3%、4~5歳14.3%、6~7歳42.9%と、全て7歳以下からの報告であった。

⑧ 突発性発しん

年間報告数は346件と、報告数が大きく減少した前年(399件)よりさらに減少し、調査開始以降、最も少なかった。

本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内で推移するとされ、6か月~1歳の小児に好発し、ほとんどの子どもが3歳までに感染するといわれている。

本年もピークは示さず、大きな季節的変動も見られないまま、一定の範囲内(0.13~0.48件/定点)で推移した。

年齢層別報告数は0~1歳91.0%、2~3歳8.1%、4~5歳0.9%と、1歳以下が大半を占めた。

⑨ ヘルパンギーナ

年間報告数は1,107件と、調査開始以降、最も少なかった前年(66件)に比べて大きく増加し、過去10年間で最も多い報告数であった。

本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である。本年は、5月下旬(第21週)から報告数が増え始め、6月中旬(第24週)にピーク(643件

／定点)を示し、この期間は全国平均と比較しても多かった。

年齢層別報告数では、0～1歳34.7%、2～3歳38.8%、4～5歳19.3%、6～7歳5.3%、8歳以上1.8%であり、5歳以下の乳幼児が約93%を占めた。

⑩ 流行性耳下腺炎

年間報告数は22件と、過去10年間で最も少なかった前年(19件)と同程度であった。

本疾患は年間を通して発生するが、晩冬から春にかけて報告数が増加するとされる。また、過去10年間では2016～2017年に大きな流行があり、数年おきに大きな流行が見られている。

年齢層別報告数は、0～1歳4.5%、2～3歳13.6%、4～5歳27.3%、6～7歳22.7%、8～9歳13.6%、10歳以上18.2%であり、4～7歳が半数を占めた。

(3) 眼科定点

① 急性出血性結膜炎

年間報告数は2件と、過去5年間では2019年(3件)以降は報告がなく、4年ぶりの報告であった。

本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性も見られず、報告数は低いまま微増微減を繰り返すとされている。

年齢層別報告数は、2件とも20歳代であった。

② 流行性角結膜炎

年間報告数は26件と前年(11件)より増加した。県内では2019年に年間117件報告されたが、その後は低値で推移している。

年齢層別報告数は、20歳未満15.4%、20歳代7.7%、30歳代34.6%、40歳代23.1%、50歳代7.7%、60歳以上11.5%と、30～40歳代の年齢層が多かった。

(4) 基幹定点

① 細菌性髄膜炎(髄膜炎菌、肺炎球菌、インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く)

年間報告数は5件で、年齢層別報告は、70歳代1件、80歳代2件、90歳代2件であった。前年は4件で、過去5年間では、毎年1～5件で推移している。

② 無菌性髄膜炎

年間報告数は12件(前年6件)で、過去10年間では、最も多かった。

年齢層別報告数は10歳未満4件、20歳代4件、30歳代、50歳代、60歳代、80歳代がそれぞれ1件ずつ報告された。

③ マイコプラズマ肺炎

年間報告数は1件と、前年(2件)より減少した。本疾患は、年間を通して発生するが、秋から春にかけてやや多くなるとされる。2019年から2022年に流行が見られたが、2021年以降は目立ったピークはなく、低水準(0.14件/定点以下)で推移している。

年齢層別報告数は、10歳代1件であった。

④ クラミジア肺炎

本年は報告がなかった。過去5年間では、2019年(1件)以降、報告はない。

⑤ 感染性胃腸炎(ロタウイルス)

前年に引き続き、本年も報告はなかった。過去5年間では2019年の8件が最も多かった。

表2：インフルエンザ／新型コロナウイルス感染症，小児科，眼科定点対象疾患の週別報告数

週	期間	インフルエンザ／ 新型コロナウイルス 感染症定点		小児科定点											眼科定点			
		イン フル エン ザ	新 型 コ ロ ナ ウ イ ル ス 感 染 症	R S ウ イ ル ス 感 染 症	咽 頭 結 膜 熱	A 群 溶 血 性 レ ン サ 球 菌 咽 頭 炎	感 染 性 胃 腸 炎	水 痘	手 足 口 病	伝 染 性 紅 斑	突 発 性 発 し ん	ヘル パ ン ギ ー ナ	流 行 性 耳 下 腺 炎	急 性 出 血 性 結 膜 炎	流 行 性 角 結 膜 炎			
1	1/2～	172	全 数 把 握 対 象 疾 患	2			101	1	5			11					1	
2	1/9～	264		3	2	1	126	6	6			4						1
3	1/16～	228		11	1	1	172	1	3			9	2					
4	1/23～	203		8			133	1	11			6	2				1	
5	1/30～	172		13	2	2	166		9			5		2				
6	2/6～	203		9	4	1	183	3	3			5		2				
7	2/13～	224		5	1	1	166		1	1	7	1	1					
8	2/20～	263		2	2		149	2				4						
9	2/27～	288		5	6	1	170	1		1	5							
10	3/6～	378		2	1	1	138	2				9						
11	3/13～	227		2	2	3	142	1				8		1				
12	3/20～	95		5		1	109					5					1	
13	3/27～	76		5	5	4	114					6						
14	4/3～	48		6	5	2	74	2		1	4							
15	4/10～	22		5	7	4	101					7						
16	4/17～	39		7	4	3	131					11		1				
17	4/24～	63		13	2	5	108	3				10	2					
18	5/1～	36		10	2	3	73	3				7	1	1				
19	5/8～	26	61	11	9	6	115	3			11	11	1					
20	5/15～	18	60	32	9	4	100	4	4		8	20	1					
21	5/22～	32	112	46	11	7	119	4	10		7	54						
22	5/29～	11	119	38	9	7	86	2	13		7	68	2				2	
23	6/5～	10	164	68	12	12	89		18		7	110						
24	6/12～	6	139	85	20	11	99		18		6	148					1	
25	6/19～	1	169	124	5	9	97		27		9	142	1					
26	6/26～	12	202	131	3	7	74		25		8	111					1	
27	7/3～	12	293	161	12	6	79		19		7	82					1	
28	7/10～	5	403	164	5	2	59		20		9	78						
29	7/17～	7	611	167	4	5	48	2	24		5	54					1	
30	7/24～	15	677	154	6	7	65	1	17		9	46						
31	7/31～	20	623	101	4	6	68	1	15		3	26	2					
32	8/7～	10	546	63	3	6	59		11		7	18						
33	8/14～	18	730	35	12	9	63	2	11	1	7	7	1				1	
34	8/21～	21	827	23	11	6	88	5	18	1	8	7	2				1	
35	8/28～	77	807	24	16	9	78		2		8	14	1				3	
36	9/4～	254	732	17	12	8	64		32	1	6	21						
37	9/11～	383	631	5	22	11	42	1	10		5	10					1	
38	9/18～	332	333		28	5	53	2	17		5	15						
39	9/25～	456	306	5	34	11	61	1	21		9	11	1					
40	10/2～	312	171	7	38	16	70	2	21		10	11					1	
41	10/9～	315	107	5	32	19	30	1	16		3	5						
42	10/16～	330	92	1	53	22	59	2	24		6	11	1				1	
43	10/23～	433	123	2	57	23	56	1	18	1	3	3						
44	10/30～	702	87	1	56	15	63	1	7		4		1					
45	11/6～	775	75	2	76	36	86	2	6		6	6					1	
46	11/13～	801	64	2	87	22	86		11		5	1						
47	11/20～	956	63	1	69	26	56	1	8		4							
48	11/27～	914	66	2	79	34	77	1	8		5						2	
49	12/4～	1,224	96		85	38	181	1	17		7	6					3	
50	12/11～	928	115	1	77	40	186	2	15		7	3						
51	12/18～	807	214		65	43	155		4		4						2	
52	12/25～	672	243		50	23	126		5		8						2	
合計		13,896	10,061	1,591	1,117	544	5,193	68	530	7	346	1,107	22	2			26	

インフルエンザ定点：内科定点と小児科定点を合わせてインフルエンザ定点とする。

3 定点把握対象疾患（月報）の動向

(1) 基幹定点（表3）

薬剤耐性菌感染症の総報告数は254件で、前年（253件）と同程度であった。疾患別の報告数においては、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症の割合が約99.6%を占めた。

表3 基幹定点（月報）報告対象疾患の月別報告数

	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	薬剤耐性緑膿菌感染症
1月	19		
2月	23		
3月	15		1
4月	17		
5月	14		
6月	22		
7月	17		
8月	26		
9月	22		
10月	20		
11月	26		
12月	32		
合計	253		1
前年	252		1

① メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

年間報告数は253件であり、前年（252件）と同程度であった。性別では、男性145件（前年148件）、女性108件（前年104件）と、男性が多かった。月別報告数では、月毎に増減はあったものの季節的な特徴は認められず、年間を通じて発生した。

年齢層別報告数は、10歳未満7.9%、10歳代1.6%、20歳代0.8%、30歳代0.8%、40歳代2.8%、50歳代4.4%、60歳代10.7%、70歳以上71.2%と、70歳以上からの報告が多かった。

② ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

前年に引き続き、本年も報告はなかった。過去5年では、0～3件で推移している。

③ 薬剤耐性緑膿菌感染症

年間報告数は1件（前年1件）であった。過去5年では、毎年0～3件で推移している。

(2) 性感染症定点（表4）

性感染症の総報告数は543件で、前年（497件）より増加した。性別では、男性371件（前年346件）、女性172件（前年151件）と、前年と比べ男性・女性ともに増加した。疾患

別では、性器クラミジア感染症（52.7%）が非常に多く、次いで性器ヘルペスウイルス感染症（27.1%）、尖圭コンジローマ（12.5%）、淋菌感染症（7.7%）の順であった。

表4 性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミジア感染症	性器ヘルペスウイルス感染症	尖圭コンジローマ	淋菌感染症
1月	26	19	1	1
2月	34	5	6	4
3月	16	14	3	2
4月	27	11	5	6
5月	25	16	12	5
6月	25	4	5	1
7月	22	10	8	4
8月	28	12	5	5
9月	23	10	7	1
10月	25	20	5	7
11月	17	13	6	3
12月	18	13	5	3
合計	286	147	68	42
前年	260	117	60	60

① 性器クラミジア感染症

年間報告数は286件と、前年（260件）より増加した。過去5年間の年間報告数も約260～280件と、ほぼ横ばいで推移している。

本疾患はわが国で最も多い性感染症であり、年々増加している。性活動に活発な若年層に多いが、女性は感染しても自覚症状に乏しいため、診断治療に至らないことが多いとされている。

月別報告数では季節的な特徴は認められず、年間を通じて発生した。性別では、男性253件（前年223件）、女性33件（前年37件）と、男性は前年より増加したが、女性は減少した。全体では男性の割合が高かった（約88%）。

年齢層別報告数では、10歳代4.2%、20歳代44.8%、30歳代23.8%、40歳代16.8%、50歳以上10.5%と、20～30歳代からの報告が多かった。

② 性器ヘルペスウイルス感染症

年間報告数は147件と、前年（117件）より増加した。月別報告数推移でも、月毎に増減はあったものの季節的な特徴は認められず、年間を通じて発生した。性別では、男性19件（前年23件）、女性128件（前年94件）と、男性は前年より減少し、女性は増加した。また性感染症全体では男性の報

告数が多いが、本疾患は女性が約87%を占めるなど、他の疾患に比べ女性の割合が高いのが特徴である。

年齢層別報告数は、10歳代4.1%、20歳代10.2%、30歳代20.4%、40歳代19.1%、50歳代29.3%、60歳代7.5%、70歳以上9.5%と、30～50歳代を中心に、幅広い年齢層で発生した。また、60歳以上からの報告数が他の性感染症と比較して多い傾向が認められたが、本疾患の原因となる単純ヘルペスウイルスは一度感染すると神経節に潜伏し、長年にわたって再発を繰り返すため、再燃の可能性も考えられる。

③ 尖圭コンジローマ

年間報告数は68件と、前年(60件)よりやや増加した。性別では、男性61件(前年43件)、女性7件(前年17件)と、男性は前年より増加したが、女性は前年より減少した。全体では男性の割合が高かった(約90%)。

患者の大部分は性活動の活発な年代であり、年齢層別報告数は、10歳代1.5%、20歳代36.8%、30歳代19.1%、40歳代27.9%、50歳代11.8%、60歳以上2.9%と、20～40歳代からの報告が多かった。

④ 淋菌感染症

年間報告数は42件と、前年(60件)より減少した。性別では、男性38件(前年57件)、女性4件(前年3件)と性器クラミジア、尖圭コンジローマと同じく男性からの報告が多く、約90%を占めた。

年齢層別報告数は、10歳代4.8%、20歳代38.1%、30歳代28.6%、40歳代11.9%、50歳代以上16.7%と、20～30歳代からの報告が多かった。

淋菌感染症の報告数は、女性の数が男性より極端に少数であることについて、女性の自覚症状が乏しく受診の機会が少ないことが要因の一つと考えられる。淋菌の感染によりHIVウイルスの感染が容易になるとの研究報告もあり、今後も動向を注視すべき疾患である。

IV まとめ

2023年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について動向をまとめた。全数把握対象疾患の届出数は19疾患35,072件であった。「新型コロナウイルス感染症」の届出数が最も多く、2023年1月1日から5月7日までの届出数(34,779件)だけで、全体の大半を占めた。新しい変異株が次々と出現してくる中、今後も手洗いやマスク着用、換気などの基本的な感染対策を徹底することが重要と考えられる。

「結核」の年間届出数は、昨年より減少し、月別届出数から季節的な特徴は認められなかった。年齢別では70歳以上の高齢者の割合が高く、性別では「女性」がやや多かった。年齢別に類型を比較した場合、70歳以上では約8割が「患

者」であったのに対し、70歳未満では「無症状病原体保有者」が約5割を占めた。また届出者の職業別において、医療・介護の施設関係者や学生など、人と接する機会の多い者も見られたことより、施設関係者に対する感染予防、施設内感染対策の徹底が重要と考えられた。

「腸管出血性大腸菌感染症」は、2018年以降は増加傾向にあったが、本年は減少に転じた。感染経路や感染源は肉の喫食等による経口感染が多かったが、接触者健診により報告された例もあった。引き続き感染拡大を防ぐため、手洗い・消毒の徹底、食品の十分な加熱及び衛生的な取り扱いなど予防啓発をしっかりと行うことが必要である。

「重症熱性血小板減少症候群」や「ライム病」などダニ等の刺咬による感染症が、野外作業機会の多い中高年者を中心に多く報告された。ダニ・昆虫媒介性疾患に対する正しい知識の普及とともに、予防対策の啓発も重要と考えられた。

「梅毒」は、近年、全国的に届出が増加傾向にあり、徳島県においても、ここ数年高い報告数となっている。20～40歳代を中心とした幅広い年齢層に対し、積極的な感染予防啓発の推進が重要と考えられた。

定点把握対象疾患(週報)では、2021年以降、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、大きく減少していた「インフルエンザ」において、本年は新型コロナウイルス感染症発生前の2019年報告(10,024件)を上回る13,896件の報告があった。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、2021～2022年の間、インフルエンザの流行が低調であったことなどの影響で、A(H1N1)亜型やA(H3N2)亜型の抗体保有割合が低下傾向にあり、インフルエンザの流行が起りやすい状況にあったと考えられる。

「新型コロナウイルス感染症」は全国と同様の経過をたどり、6月下旬(第25週)から増加し、8月下旬(第34週)でピーク(22,35件/定点)を迎えた。流行期や感染者数の動向について、今後も注視すべき疾患である。

夏風邪に代表される「ヘルパンギーナ」は、過去10年間で最も多い報告数であったが、「RSウイルス」と「手足口病」は前年より増加したものの、比較的緩やかな増加であった。また、全国的に秋から冬にかけて「咽頭結膜熱」の流行が見られ、県内においても過去10年間で最も多い報告数であった。「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎」も全国よりは少ないものの、秋から冬にかけて増加が見られた。

また「細菌性髄膜炎」や「無菌性髄膜炎」など報告数が少ない感染症は例年と同程度であった。

眼科定点報告疾患、基幹定点報告疾患については、前年と傾向は変わらず年間を通じて報告数は低値で推移した。

定点把握対象疾患(月報)の基幹定点報告疾患である薬剤

耐性菌感染症については、総報告数に大きな変化は見られず、「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」が大半を占めた。

また、性感染症定点報告疾患について、総報告数は前年より増加し、男女別報告数は前年と同様に、男性からの報告が多かった。報告数の多い20～40歳代を中心に、引き続き予防啓発を行うとともに、若年者に対する予防教育も重要と思われた。

前年までは、新型コロナウイルス感染症の影響で報告数が減少していたが、本年からインフルエンザを始めとする他の感染症報告数が増加傾向にあった。新型コロナウイルス感染症が定点把握対象疾患感染症（五類感染症）へ指定され、日常生活や社会生活の変化が要因の一つと考えられた。引き続き、関係する医療機関や保健所等の協力を得ながらデータの収集や解析を行い、感染症の発生動向を注視していくとともに、迅速かつ適切な情報提供を行っていきたい。